

インターアクション場面の变化と社会ストラテジー：日豪での縦断的調査研究から^(注)

宮崎里司
モナシユ大学

ピロツタ丸山淳
立教大学

学習者のインターアクション場面（接触場面）が多様化すると、学習者自身が、習得過程を管理し、問題を処理する能力（学習者ストラテジー）の使用も変化する。新しい日本語教育を考える場合、こうした認識はますます重要になってくるであろう。本研究は、国際接触場面の变化に伴う学習者ストラテジーの使用の変化を社会ストラテジーを中心に、日豪2か国で調査した一年間の縦断的研究である。分析の結果、社会ストラテジーの使用は、必ずしも日本での滞在期間に比例せず、むしろ減少することがわかった。これは、インターアクションのタイプの固定化と関係があるのではないかと推察できる。また帰国後は、ほとんどの学習者に、日本で使われていた社会ストラテジーが確認されず、維持に問題があることがわかった。

The interactive contact situations experienced by Japanese language learners tend to become more intercultural as their learning proceeds. It can be hypothesized that social strategies (Oxford, 1990) play an important role in order to make the most of real life interactions in intercultural contexts. Few attempts, however, have been made to empirically explore what types of social strategies are used when learners are immersed in such situations. This paper reports on a longitudinal study of the changes in the use of social strategies by nine Australian university students during and after stays in Japan, and aims to examine previously unidentified issues of acquisition and maintenance of language learning social strategies.

The research was conducted over a one-year period in Japan and Australia. The data included a questionnaire administered prior to the students' stays in Japan, learning diaries maintained by students during and after their stays, and four follow-up interviews on the contents of the diaries, conducted every two months in Japan and six months after the students returned to Australia. The data were analyzed following Oxford's (1990) list of six types of social strategies: asking for clarification or verification, asking for correction, cooperating with peers, cooperating with proficient users of the L2, developing cultural understanding, and becoming aware of others' thoughts and feelings.

The data revealed that learners consciously applied and acquired social strategies while in Japan, confirming the assumption that learning in Japan helps JSL learners' use of social strategies. The length of stay and the use of strategies, however, seem to negatively correlate. For example, one learner remarked during a follow-up interview that she tended to talk to the same people. It is suspected that Japanese NS become accustomed to the language used by JSL learners they frequently contact, and that in such cases learners do not require use of social strategies for success in communication. It was also discovered that learners were not necessarily involved in a wider variety of activities to maintain their Japanese upon their return to Australia than they had been prior to visiting Japan. Most students reported that this was because they were busy preparing their dissertation and did not have many opportunities to use Japanese, which they said resulted in a loss of confidence and subsequent hesitation to interact with Japanese speakers in the local community. This suggests there is no guarantee social strategies learned in an L2 situation will be maintained when learners return to a FL environment.

The number of subjects in this study is limited. As such, the findings are preliminary. However, we would like to suggest the following four items warrant further investigation: 1) Empirical research is needed to develop a more comprehensive list of social strategies; 2) The hypothesis of fossilization (Schumann, 1978) might be applied to the acquisition and maintenance of social strategies; 3) Interaction with host families may not always be a model for target language production, especially after the initial settling-in period; and 4) As language learning strategy training is thought to enhance autonomous learning, study of how this can be done effectively with learners prior to their going to the L2 environment is needed.

日本語の学習段階が進むにつれて、学習者の目標言語との接触場面はどのように変化するのであろうか。彼らは「実際使用」(ネウストプニー, 1995) 場面でのインターアクション能力の習得のために、接触場面を多様化させていくのではないかと考えられる。オーディオ・リンガル・アプローチ以降の新しい日本語教育の目標が、接触場面で起きるさまざまなインターアクション上の問題への対策を提供すること(尾崎・ネウストプニー, 1986)であるならば、習得が進むにつれ、接触場面がどう変わるか、それにともなって起きる問題にはどんなものがあるかなどを検証し、それに対応できるコースデザインを検討する必要があるだろう。

習得場面でのインターアクションの問題を調べる場合、学習者の習得過程を誰が管理するのかを考える必要がある。今までは、主に教師による管理(教師ストラテジー)に注目していたが、学習者自身によるストラテジー(学習者ストラテジー)も、体系的に調べる必要がある。Oxford (1990) は、このストラテジーを、直接ことばに働きかける直接ストラテジーと、習得のための条件を設定する間接ストラテジーに分類している。間接ストラテジーには、学習者自身が習得過程をモニターし評価するメタ認知ストラテジー、情意面のコントロールに関する情意ストラテジー、習得過程で起きた問題をネーティブ・スピーカーや、他の学習者とのインターアクションを

通して調整、または訂正していく社会ストラテジーが含まれる。これらの学習者ストラテジーの中でも、社会ストラテジーは、インターアクション能力の習得に大きな影響を与えるストラテジーであると見られている（ネウストブニー、1995）。Oxford（1990）は、この社会ストラテジーを以下のように3つに分け、それをさらに下位分類している。

1. 質問をする。
 - 1-1. 明確化あるいは確認を求める。
 - 1-2. 訂正してもらう。
2. 他の人と協力する。
 - 2-1. 学習者同士が協力する。
 - 2-2. 外国語に堪能な人と協力する。
3. 他の人々へ感情移入をする。
 - 3-1. 文化を理解する力を高める。
 - 3-2. 他の人々の考え方や感情を知る。

本稿は、日本語を学ぶオーストラリアの大学生を対象にして、1993年に実施した日豪での縦断的調査（第1回目）の結果から、オーストラリアから日本へ習得場面を変えた後の、学習ストラテジーの使用の変化、および帰国後の日本語の維持活動などを、社会ストラテジーの使用を中心に考察した基礎的研究である。

調査方法

1993年、モナシユ大学のオナーズ・プログラム（注2）及び修士課程に在籍し、6か月間日本に滞在した20代の学生9名（女性8名、男性1名）を被験者として選んだ。日本語学習歴は3年から8年（平均4.8年）で、一人を除き平均6.6か月の在日経験があった（表1）。まず、来日前に、この9名が教室外で、日本語によるどのようなインターアクション行動をしているかを把握するために、アンケート調査を行った。さらに、在日中及び帰国後の社会ストラテジーの使用の実態を調べるため、東京とメルボルンで、被験者が書いてきた学習ダイアリー（付録）をもとに、在日中約2か月間隔で3回と、帰国6か月後に1回（注3）、約1年間にわたって計4回のインタビュー調査を行った。この調査は、（1）インタビュー前日のインターアクション行動の中で起きた問題とその処理、（2）その日に成功したインターアクションの評価、（3）インタビュー前の一週

表1 被験者一覧

	性別	日本語教育機関での学習経験		在日歴
		Secondary	Tertiary	
FS1	女	4年	2年	12ヶ月
FS2	女	-	3年	9ヶ月
FS3	女	-	3年	10ヶ月
FS4	女	5年	3年	6ヶ月
FS5	男	-	4年	なし
FS6	女	5年	3年	2週間
FS7	女	-	3年	9ヶ月
FS8	女	2年	3年	11ヶ月
FS9	女	-	3年	6ヶ月

間の自己学習評価、(4)これから予想されるインターアクション場面での問題処理方法の3つの項目から構成されている。項目ごとに学習ダイアリーシートに記入させ、そこで報告された内容をフォローアップするために、20~30分程度のインタビューを行った。録音されたインタビューの内容は、学習行動を中心にまとめられ、その中で具体的に確認された社会ストラテジーを、Oxford (1990)の6つの分類項目に従って分類し、分析を行った。

来日前、在日中の調査結果及び分析

来日前のアンケート調査の結果(表2)から、ほとんどの被験者が、教室外でもネイティブ・スピーカーとの接触があったことがわかる。しかしながら、接触の頻度は、それほど高くなく、また、Aのタイプ(教室外での日本人とのインターアクション)の活動に加えて、その他(B~E)のタイプの活動を行っている者は、少なかった。図1は、在日中の社会ストラテジーの使用の変化をタイプ別に表したものである。ここから分かるように、6つのカテゴリ全てが確認され、使用変化には、タイプI(1回目と3回目で、ほとんど変化がみられないタイプ2種類)、タイプII(1回目より3回目のほうが増加しているタイプ1種類)、タイプIII(1回目より3回目のほうが減少しているタイプ3種類)の3タイプに分けられることがわかった。タイプIIIに分類されるストラテジーが最も多いということは、社会ストラテジーの使用が、必ずしも滞在期間に比例するものではないことを示している。

さらに、在日中のインタビューごとに、個人別に、使用している社会ストラテジーの種類の変化を(表3)見ても、使用する社会ストラテジーの多様性が滞在期間に比例するわけではないことがわかる。来日から2か月後の1回目のインタビューでは、

図1 インタビューで確認された社会ストラテジーの変化のタイプ

タイプI: 1回目と3回目の使用がほぼ同じ(2種類)



- ⇒ ・日本人や日本人に堪能な人と協力する
- ・他の人々の考え方や感情を知る

タイプII: 1回目比べて3回目の使用が増加(1種類)



- ⇒ ・学習者同士が協力する

タイプIII: 1回目比べて3回目の使用が減少(3種類)



- ⇒ ・明確化や確認を求める



- ⇒ ・文化を理解する力を高める



- ⇒ ・訂正してもらう

平均して3.56種類の社会ストラテジーが使用されたが、2回目が2.78種類、3回目が1.78種類と、むしろ減少している。在日中の社会ストラテジーの使用を、さらに詳しく見てみると、「日本人や日本語に堪能な人と協力したり」、「他の人々の考え方や感情を知る」ストラテジーは、3回のインタビューを通して使用が確認された。また、「学習者同士が協力する」ストラテジーの使用は、滞在期間に比例することがわかった。しかし、「質問をして、明確化あるいは確認を求めたり」、他から「訂正（調整）してもらう」ことによって自分のインターアクション問題を解決するストラテジーの使用は滞在期間に比例せず、減少する傾向が見られた。また、「文化を理解する力を高めようとする」ストラテジーにも、同じような傾向がみられた。

こうした結果は、被験者の次のような報告によって裏付けられる。「日本に滞在した後半は、論文のための調査や資料収集が中心になり、なかなか日本語の勉強に集中できなかった」（FS6、FS8、FS9）という報告があり、また、「いつも同じ人と話しがちになる」（FS6）ため、そのインターアクションが習慣化し、相手の日本人の発話の特徴がわかってくると、聞き返す（質問する）ことによって、確認を求めたり、訂正してもらう行動が少なくなるのではないかと考えられる。さらに、一人の学習者は「日本人は、自分の間違いをもっと直してほしい」（FS7）と述べており、被験者が接触したネイティブ・スピーカーは、学習者が期待するほどには、訂正行動をしていないのかもしれないと疑える。

これと関連して、被験者の滞在先をみると（表4）、全員が2～6か月間、ホーム・ステイをしていることがわかる。本稿の基礎になっている調査では、ホスト・ファミリーとのインターアクションについては、十分なデータを採集していないが、在日中のインターアクション問題の解決のための確認や訂正要求のストラテジーの使用率が、必ずしも滞在期間に比例しないという結果と、ホスト・ファミリーとのインターアクションが、どのように関係しあっているかを、インタビューの分析から考察してみると、次のような仮説が立てられる。「ホストファミリーとの接触場面では、他の日本人の場合と比べ、同じようなタイプのインターアクション（決まったメンバーによる、同じトピックの会話など）が繰り返される可能性が高い。学習者が、彼らとのインター

表2 来日前の日本語の維持活動

	維持活動		維持活動		維持活動
FS1	—	FS4	A, B, D, E	FS7	D
FS2	A	FS5	A	FS8	A, C, E
FS3	A	FS6	A, B	FS9	A

- A* : 教室外での日本人とのインターアクション
 - B* : 日本にいる日本人と手紙によるインターアクション
 - C : 日本の映画、ビデオを見る
 - D : アルバイトで日本語を使う
 - E : 日本の漫画を読む
- (*英語でインターアクションする場合もあると報告された)

表3 在日中に確認された社会ストラテジーの種類

	FS1	FS2	FS3	FS4	FS5	FS6	FS7	FS8	FS9	平均
1回目	3	3	5	4	3	4	4	2	4	3.56
2回目	4	2	2	4	2	2	3	3	3	2.78
3回目	1	3	2	2	2	2	1	2	1	1.78

アクションの中で、いつも決まったコミュニケーションの問題（表現や発音の違い）を起こす場合、ホスト・ファミリーは、学習者の中間習語に慣れ、訂正のためのコミュニケーション交渉（Long, 1983）を行わず、訂正を回避する傾向がある。」しかしながら、ホーム・ステイに関するケース・スタディとして、Hashimoto (1993) は、交換留学で1年間日本に滞在したオーストラリア人の女子高校生とそ

のホスト・ファミリーとの6つのインターアクション場面を分析し、ホスト・ファミリーとのインターアクションが、コミュニケーション能力の習得のための有効なリソースであると結論づけている。インターアクションのネットワーク、頻度および内容の固定化の問題は、学習者が接触場面でインターアクションを創出するストラテジー（場のネットワーキング）（春原, 1992）とあわせ、これからさらに検証していく必要があるであろう。

帰国後の維持

最後に、帰国後行ったインタビュー調査で、どのような日本語の維持活動をしているかを調べた（表5）。表2（来日前）と比較すると、社会ストラテジーを含んだ教室外活動の種類は、増加したのが3人、変化なしが3人、減少したのが3人で、平均すると来日前と比べ、ほとんど変化がなかった。また、滞在歴が長い学習者（FS1、FS3、FS8）でも、維持活動のバリエーションはかなり少ないことがわかった。理由は、オナーズの論文などで、日本人とインターアクションをもつ機会が十分になかった（FS4、FS6、FS8、FS9）ことなどが挙げられた。また、そうした機会があっても、日本語の使用について徐々に自信をなくしたために、消極的になった（FS1、FS2、FS3、FS4、FS6、FS7、FS9）。とほぼ全員が報告している。その対策として交換レッスン（FS1、FS2、FS3、FS4）などを計画したが、日本人は英語を使用したがるので、十分な効果が期待できなかった（FS1、FS6、FS8）という報告もされた。日本に滞在中も、社会ストラテジーの減少傾向

表4 在日中の滞在

	ホストファミリー	その他（アパート等）
FS1	②2ヶ月	①1週間 ③3ヶ月
FS2	6ヶ月	-
FS3	6ヶ月	-
FS4	①2ヶ月 ②2ヶ月	③2ヶ月
FS5	①3ヶ月 ②3ヶ月	-
FS6	①3週間 ②2ヶ月 ③3ヶ月	-
FS7	①2ヶ月 ②4ヶ月	-
FS8	6ヶ月	-
FS9	①2ヶ月 ②4ヶ月	-

(①②③：移り住んだ順番を示す)

表5 帰国後の日本語の維持活動

	維持活動		維持活動		維持活動
FS1	A, B	FS4	A, B	FS7	A
FS2	A	FS5	A, B	FS8	B, C
FS3	A, C	FS6	-	FS9	A

A：教室外での日本人とのインターアクション

（交換レッスンも含まれる）

B：日本にいる日本人と手紙によるインターアクション

C：日本人関係協会（兼日協会など）の
アクティビティに参加

が確認されたが、ストラテジーの維持は、帰国後もかなり難しいものと推察できる。

結 論

多くの日本語学習者にとって、インターアクション能力の習得は、日本国外の限られた接触場面で行われる。インターアクション場面で起きる問題をどう処理するのか、そのためにどのようなストラテジーが必要かは、海外ではとくに意識化する必要があるだろう。また、日本においても、教室以外の場面での習得の意義を認めるならば、学習者ストラテジーへの配慮の必要性は否定できないだろう。しかし、学習者ストラテジーの研究は、日本語教育においては比較的新しい研究分野であり、検証すべき事柄も多い。今回の研究は、来日前、在日中及び帰国後の社会ストラテジーの使用の変化、日本語能力と使用ストラテジーの関係について十分な検証がなされていないため、以下の4点を今後の研究課題として記しておく。

(1) 学習者が、社会ストラテジーを用いて対処すべき事柄の範囲は、おそらくOxfordのリストよりかなり広いと予想できる。例えば、ネイティブ・スピーカーとのネットワークを作るストラテジーなどは、社会ストラテジーの中に含まれるべきものであろう。逆に、明確化あるいは確認を求めたり、訂正してもらうなどのストラテジーは、コミュニケーション・ストラテジー、または、直接ストラテジーの中の補償ストラテジーとして分類するのが適当であろう。こうした不備を改善するためには、より詳細な社会ストラテジーの分類項目を作り、その検証を急ぐ必要がある。

(2) Schumman (1978) は、中間言語の化石化 (Selinker, 1972) が起きる条件として、学習者が目標言語が話されている社会から隔離された場合と、目標言語の使用機能が限定された場合の2つをあげている。上で指摘したインターアクションのネットワーク、頻度および内容の固定化の問題は、化石化現象と関わりをもつかもしれないことが考えられる。社会ストラテジーの使用の変化と化石化現象にどのような関係があるのかを検証する必要がある。

(3) ホームステイ場面でのインターアクションを、習得およびネットワークなどの固定化の両面から再検討する。こうした場面での訂正交渉が、実際の習得に役立つかどうか、さらに検証する必要がある。

(4) 帰国した学習者に、どのようなインターアクション能力の向上が見られたかを調査したものは、交換留学生などを対象にした研究が代表的である (Marriott, 1993)。しかし、在日中および帰国後に社会ストラテジーの使用が減少する傾向にあることを考えると、来日前にどのような学習者トレーニング (O'malley, 1987) を行うべきかを検討する必要があると考えられる。

宮崎里司は、オーストラリアのモナシュ大学日本研究科講師、日本語教育と第二言語習得を専門分野としている。

ピロッタ丸山淳は、立教大学国際センターなどで日本語を教えている。日本語教育と異文化間コミュニケーションを専門分野としている。

注

- (注1) 本稿は、1994年度日本語教育学会秋季大会での発表(宮崎・ピロッタ丸山)をもとに、加筆修正されたものである。データ収集にあたっては、長田紀子氏に多くのご協力を願った。ここに感謝の意を表する。
- (注2) オーストラリアの大学の文学部では、3年でpass degreeを取得して卒業する学生と、4年に進級しhonours degreeを取得する学生に分かれる。
- (注3) 4回目のインタビューでは、FS2とPS4がメルボルンにいなかったために、記述報告をしてもらった。

参考文献

- 春原憲一郎。(1992)。「ネットワーキング・ストラテジー：交流の戦略に関する基礎研究」『日本語学』11巻、10号、17-26頁。
- Long, H. (1983). Native speaker/non-native speaker conversation and the negotiation of comprehensive input. *Applied Linguistics*, 4 (2), 126-141.
- Marriott, H. (1993). Acquiring sociolinguistic competence: Australian secondary students in Japan. *Journal of Asian Pacific Communication*, 4(4), 167-192.
- 宮崎里司、ピロッタ丸山淳。(1994)。「インターアクション場面の変化にともなう学習者ストラテジーの習得、維持及び化石化：日豪での縦断的共同インタビュー調査から」日本語教育学会秋季大会予稿集、68-71頁。
- ネウストブニー、J. V. (1995)。『新しい日本語教育のために』東京：大修館書店
- O'Malley, M. (1987). The effects of training in the use of learning strategies on acquiring English as a second language. In A. Wenden & J. Rubin(Eds.). *Learner strategies in language learning*. (pp. 133-144) London: Prentice Hall.
- Oxford, R. (1990). *Language learning strategies: What every teacher should know*. New York: Newbury House.
- 尾崎明人、ネウストブニー、J. V. (1986)。「インターアクションのための日本語教育：イマーシブプログラムの試み」『日本語教育』59号、126-143頁。
- Schumann, H. (1978). The pidginization process: A model for second language acquisition. Rowley, MA: Newbury House.
- Selinker, L. (1972). Interlanguage. *IRAL*, 10, 201-231.

(195年10月15日、1996年5月11日受)

付録 学習ダイアリー

1. Learning Diary

I used my Japanese yesterday			
Where?	With whom?	What for?	Any problems

2. Successful Interaction

One thing I did well in Japanese yesterday was:			
Where?	With whom?	What for?	Because

3. Weekly Self-evaluation

How do you feel about: (Circle the most appropriate)	very good	quite good	not very good	terrible
How do you feel about your progress last week?				
If you circle 'very good' or 'quite good', please list the 5 activities YOU found most helpful last week:				

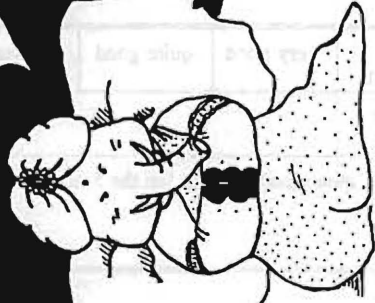
4. How to Cope with a Coming Event

Do you feel you need to practise for the coming interaction with a Japanese? (e.g review of keigo, particle, pronunciation, non-verbal behaviour and so forth)

Give details of the situation you will encounter with a Japanese in the near future and jot down some items (grammatical, communicative and cultural) you need to practise.

I will contact with a Japanese in the near future and I would like to practise first for the interaction. Details will be as follows.			
Where?	With whom?	What for?	I need to practise:

The books fly to
you from ...



Free dial

0120-071329

Nellie's
DISCOUNT BOOKS

Tel: 03-3676-1747

Fax: 03-3676-1815